
本日は晴天なり

新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本日は晴天なり

【NZコード】

N0625A

【作者名】

新

【あらすじ】

「ごく平凡な女子高生である島田正美が取り憑かれてしまったのは、死んだはずのクラスメート・坂上正美の靈魂だつた。」“正美”は“坂上くん”が残したという未練を探すため、奇妙な共生生活を余儀なくされてしまった。「本日は晴天なり」を合い言葉に、一人は坂上が生きてきた道のりを、共に歩み始める。

第一話 正美、取り憑かれる

友人が死んだ。

いやいや、のつけから申し訳ない。わたし自身、突然のことに少々驚いているのだ。知らせを受けたのが昨日の晩で、今日にはもう葬式に出ているのだから、頭の切り替えだつてうまくいかない。分かつてほしい。

週末の夜の出来事だつた。金曜日の夜つてなんにもする気が起きたく、ただぼうと自分の部屋でドラマ見てたら、お母さんが血相を変えて飛び込んできた。クラス連絡網で回ってきたのは、クラスメイトの坂上くんの死だつた。

わたしが通う高校の制服は淡い緑色をしているので、仕方なく、わたしは中学時代の防腐剤臭い制服をタンスの奥から引っ張り出した。これはちょうどよく黒っぽい色をしている。

中学時代三年間連れ添つた服のはずなのだが、久しぶりにその制服へと袖を通した時は、他人の部屋に上がり込んだような違和感を覚えた。

死んだのは、わたしが通うクラスの男子 坂上くん。どうやら、自転車で走つてる時にトラックに巻き込まれたらしい。即死だつたそうだ。

思えば、わたしは死に接する機会が少なかつたように思う。両親は健康だし、兄弟はない。そして祖父母はわたしが生まれる前に二人とも他界しているそうなので、わたしにある“死”的体験と言えば、小さい頃に飼っていたカナリアがのら猫に食べられてしまつたことくらいだと思う。

というわけで、休日であるはずのわたしの土曜の予定に、葬式が追加された。

葬儀は坂上くんの家ではなくて、メモリアルホールなんとかといつた、ちょっとした講堂みたいな施設でやつていた。午後五時、わ

たしがそこへと仲間三人くらいで集まつてから到着した時、クラス担任の先生は何とも渋い表情をしていた。先生は全員が集まつたのを確認すると、中へ入るように促した。

わたしの知らない喪服の人たち たぶん、坂上くんの親戚の人だろう がたくさん集まつているのをすり抜けて、わたしたちは坂上くんと対面をした。

対面と言つには、それはあまりも無機的だった。

わたしが見たのは、恐らくこの中に坂上くんが入つてているであろう金色の棺桶と、坂上くんの顔が映つている写真だった。写真の中で、坂上くんはぶすつとしてる。たぶん、急なことだつたのでちょうどいい写真が用意できなかつたのだろう。中学時代の制服と思われるブレザーが肩まで映つているその写真は、きっと、高校入試用に撮られた証明写真だと思つ。

わたしにも経験がある。何でか分からぬけど、わたしはあいつた時に笑顔を作れない。

わたしは、坂上くんが笑つてゐる顔を知つてゐる。あんなぶすつとした顔じゃなくて。

でも、もう二度と、坂上くんの笑顔は見られなくなつてしまつた。そう思うと、無性に感情がこみ上げてくる。

わたしは坂上くんと仲が良かつた方じやないし、大した会話もしていない。

だけど、昨日まであんなに元気だつた人が、こうもあつさりいなくなつてしまつとなると、やつぱり感慨深いものがある。「悲しい」とは、またちよつと違う感情なのと思つた。

だつて、涙が出てこない。死んだのが坂上くんだから、なのかもしない。鏡を見てみれば、きっとわたしは、お面を被つたような無表情でいるのだろう。

あえてこの感情を言い表すならば、「虚しい」と思つた。手のひらに落ちた雪の粒のようにあつさりと消えてしまつ、命のはかなさ。

わたしは今日、それを知つてしまつた。誰もいなくなつた遊園地に一人紛れ込んでしまつたようかのな、胸にぽつかりと穴の空いた気持ち。

「正美　」

線香の匂いが立ち込める小スペース　きつと名前が付いているのだろうけど、わたしにはこれを挿す言葉を知らない。だから、小さなスペース。その小さなスペースの横で、延々とお坊さんがお経を読んでいる。金色の棺桶の上には、例のむすつとした坂上くん。そして灰が入つた……これも言葉が見つからない。灰が入つた小さな風呂桶みたいなやつ。思えば、お葬式に出るのはこれが初めてだ。もちろん、通夜と告別式の違いなんて分からない。

「ねえ、正美」

坂上くんの「」両親。「つむぎ、歯を食いしばつていてるのがお父さん、真つ白いハンカチでしきりに田頭を押さえているのがお母さんだろう。

坂上くんは、どちらかって言つとお母さんによ似ている。

「正美つてばー。」

彼女の言葉に、ハツとわたしは気が付いた。

正美とはわたしの名前。暗闇でいきなり背中をつねられたかのように、わたしはビクッときをくめてしまつ。

「な、何！？」

「何をばつゝとしてるの？　早く先に進んで」

そうだった。わたしたちは何故か、うまいと評判のラーメン屋にできる行列みたいなを作っていたのだ。この行列が、あの例の灰をつまんでおでこに近付けるためであると知ったのは、ついさっきのことであった。その行為が何のためなのかは、いまだに分からないけど。

「あ、『ごめん』『ごめん』

彼女は、佳奈というわたしのクラスメイトだ。お母さんに貸してもらつたという真っ黒い喪服と、染め直すのが間に合わなかつたというウェーブ掛かつた茶髪が不釣り合いで、笑える。

それにしても、佳奈はルックスもさることながら、雰囲気も場違いだ。こんな場所にもかかわらず、声がばかでかい。さつきもわたしの名前を大声で叫んだ時、会場中の視線がわたしに集中するのを痛いほど感じた。特に尋常じゃなかつたのが、坂上くんの『ご両親』すごい速さでわたしの方に顔を向けたかと思うと、睨み殺さんばかの視線で見つめていたのである。ちょっと恐かつた。

で、何だかんだあつて、わたしが灰をつまんでおでこに近付ける番になつた。後で知つたんだけど、この行為は“『ご焼香』”って言うらしい。坂上くんの靈を慰めるためにするのだと言つ。昔の人の考えることつて、よく分からぬ。

ふと、写真の中の坂上くんと田が合つた。

もう、この顔を見ることはなくなつてしまつたのだろうか。

いつか、坂上くんのことを忘れてしまう田が来るのだろうか。

わたしにも、忘れられる日が来るのだろうか。

考えただけでも気が滅入つてしまいそうだった。ああ、虚しい。

虚しさに押し潰されそうになつてしまつたわたしは、急いで『ご焼香』を済ませた。一秒だつて坂上くんの前にいたくはなかつた。だけど、何だか坂上くんのぶすつとした顔が、わたしのことを睨み続けてるみたいで気味が悪かつた。だからわたしは、心の底から彼の冥福を

祈つた。

成仏してください、坂上くん。

.....

島田正美。それがわたしの本名。

自分で言うのも変だけど、普通の高校に通う、普通の女子高生。昨日はちょっと非日常的なことを体験したけど、今日はいたつて普通の朝だ。ん？ 朝？ 朝と呼ぶにはもう遅すぎる時間だった。鳥のさえずりももう聞こえない。お天道様は完全に昇つてしまつた。こんな時間まで眠つていられるのも、日曜日のおかげである。

昨日はお葬式。で、今日はもう予定がない。

坂上くんが死んでから、今日で一日が経つた。時間の流れは誰がどうしたって止めることはできない。そして、時の流れは残酷だ。少しずつ、少しずつ人々の記憶を消してゆく。それが楽しいことだろうが、悲しいことだろうが。

始めは濃かつたはずの色の水も、水が増されるに従つて薄まってゆく。水道から落ちる細い水の流れが、少しずつ薄めてゆく。これが時間の流れだ。

そうして人は忘れられる。ああ……虚しい。

.....

薄目を開ける。日差しが瞳に差し込み、わたしは思わず目を細めた。

「やつと起きたの」

時計へと目をやる。午後十一時半。

正午前までに起きられたのは、いつもなら早い方だ。むしろ褒めてもらいたい。

「まつたく、こつまで寝てる氣だつたの？」

いや、そいつわれても。あえて言つなら、起きるまで。

「まあいこや、とにかく」

……ちよつと待つて。

「ん？」

あんた……誰？

わたしは布団を引きはがし、身を起こした。
そして首をキヨロキヨロと、公園を歩くハトみたいに動かす。
目に入るのはどれも見慣れたものばかり。

白い壁紙、本棚、その上にオーディオ、机、電気スタンド、クローゼット、観賞用サボテン……。

だけど、どこを探しても、声を発するような生き物　人間の姿
はない。

「だ……誰よ！？」

「あ、自己紹介がまだだつたね」

「自己紹介？　てかあんた、今どこにこりのよ！？　隠れてないで
出できなさい！」

わたしは声のする方を向こうとする。

だが、それがどこなのか、まるで見当が付かない。

上からのよつでもあれば、下からのよつでも、右からのよつでもあれば、左から聞こえる氣もある。わたしは、磁力の狂った森の中へと迷い込んでしまったよつな錯覚を受けた。

「ビリー。」

ただ、何となく感じるのは、その声は、頭の奥から聞こえてくるよつな氣がする。本当に何となくだけど。

「いやあ、ビリーと聞われても……」困ったよつな声。

「たぶんだけど、僕の姿は君に見えないんじやないかな？」

はあ？ 何を言つてゐるの？

「ほひ、今僕が何をしてるか分かんないでしょ？ 君の田の前にいるんだけど」

田の前？ わたしの田の前の空間には何もないし、あえて言つたら、わたしの目線の先には一株のサボテンがあるだけだ。いや、あれはサボテンだし。サボテンが喋るわけないし。

「正解は、アイーンでした。分かんなかつたでしょ？」

アイーンをしてる奴の姿なんてこれっぽつとも見えないわよ。てか、ふざけないで。何がアイーンよ。

「ね、やつぱり見えないみたい」

……ちよつと待て。

「え？」

「こつ、どうしてわたしが何も喋っていないのに話ができるんだろう。わたしが口に出して言つてなにのこと、普通に返事をしてくる。

「ああ。まあ、その辺はファーリングで？」

いや、意味が分からないし。

ただ一つ分かるのは、この声　　声と呼べるのかは微妙であるが、どこかで聞いたことのあるような気がする。

「まあ、とにかく話を聞いてくれよ」

寝ぼけた頭で、ふと思つた。

なるほど。これは夢なんだ。

夢なら何でもいざれだ。空を飛べようが、瞬間移動ができるようが、透明人間になれようが、誰も文句は言えまい。

そう思つたわたしは、もう一度布団へと潜り込んだ。

確かに夢なら何でもいいけど、こんな不快な夢はチョンジチョンジ！　無理矢理にでも違う夢にしてしまおう。

「おーー、また寝る気？」

はーはー、いりますよ。

姿の見えない誰かが心に話しあげてくるなんて、例え夢であってもいい気分じやあないから。

「まつたく……じゃ、起きたらちゃんと話を聞いてね？」

はーい、分かりましたよー。

布団の中ではたしては田を開ける。泥沼の中へと旅立つていった。ん? 元々
ゆっくりとわたしの意識は夢の中へと旅立つていった。ん? 元々
これが夢なのだから、厳密に何て言えばいいのだろう? 夢のま
た夢……違うな。

そんなことを思ひながら、わたしては再び眠りに就いた。

薄田を開ける。田差しが瞳に差し込み、わたしては思わず田を細め
た。

「やつと起きたの」

時計へと田を開く。午後二時。

「またぐ、こつまで寝てる気だったの?」

「ああここや、とにかく
こや、やうやくわれても。あえて言つながら、起きたも。

「ああここや、とにかく

……おひと待つて。

「ん?」

あんた……めだいの?.

「当たり前でしょ」

びっくり箱の中の人形のような勢いで、わたしは布団から飛び起きた。そして、伸びキョロキョロと部屋を見渡す。

「つー、何度同じことあるの？　あはは」

これはたまたま。わたしはまだ同じ夢を見ているのだけれど、だとしたら、ずいぶんと昔の細かい夢だ。

「いや、だから夢じゃないみたい」

夢じゃない？

「うそ」

じゃあ、現実ってこと？

「その通り」

うう。

「嘘じゃないよ。試してみれば？」

わたしがまっぴらを思い切りつぶつとめた。

「いじででー」

「ね？」

痛い。

……とこ‘ひ’じとば。

「何度も言つてるでしょ？ 現実なんだよ」

現実……。

「やつと氣付いた？」

へえ、これが現実なんだ。この、姿も形も見えない人の声が心に聞こえてくるのが現実なのだと言つ。ああ、事実は小説よりも奇なりとは、よく言つたものだなあ。

「あはは」

分かつたわよ。取りあえず現実つてことにしてあげる。

「うん、だいぶ時間が掛かつたけどね」

でも、はつきりさせておきたいことがあるの。

「何？」

あんた、何者？

「僕？」

うん。

「正美だよ」

正美？

「うん」

ふざけないでよ。正美はわたしの名前よ。

「いやいや、ふざけちやこないつて

ど「こ」う意味？

「正美って名前は、君だけの持ち物じゃないでしょ？」

まあ、それもそうだけど。

世の中に同じ名前の人人がいることくらい、わたしにも分かる。不意に、わたしは不思議な感覚を覚え始めた。この謎の声と会話をしているうちに、過去にも何度も、こうして話をしたことがあるよな……そんな気がしてきたのだ。

「僕の名前は　」

それは、彼の次の言葉を聞いた瞬間に分かった。その言葉が鍵となつて、一つのドアが開いたのだ。

「坂上正美、だよ」

.....

わたしはそれを見た時、大して驚かなかつた。だって、わたしの行為はただの確認だったから。それは、スケルトンの箱でできたび

つくり箱を渡されたようなものだつた。開ける前に一回驚いてしまつたから、開けた時にはビックリはないのだ。

わたしが机の奥底から取り出したのは、一枚のプリント。クラス名簿だ。わたしのクラスメイトの電話番号、住所、そして、名前が記録されている。

彼は、確かにわたしのクラスメイトだつた。

2年3組21番、坂上正美。

わたしと同じクラスに、わたしと同じ名前の生徒 しかも男子が いたなんて、今の今まで知らなかつた。生前の坂上くんとはろくに話をしたこともなかつたし、彼の名前がわたしと同じだつたなんて、本当に氣にも留めなかつた。昨日のお葬式の時も、そんなことまで氣にする余裕はなかつた。

「まあ、改めてようしきね。島田さん」

坂上くん と乗る声 は、わたしの動搖が治まるのを待つていたのだろうか。

混乱し続けた頭の中がやつと静まり掛かつたといひで、また声を掛けってきた。

いや、だから。全然意味が分からんんだけど

「何が分からないの？」

全部よ、全部。死んだはずの坂上くんの声が何で聞こえるのか。どうしてそれがわたしなのか。そして、「ようしき」ってどういう意味？

「ああー、そんなに一度に聞かれても……」

「ひぬせい」。とにかく答える。

「う、島田さんって……けっこう恐い人だつたんだね」

何それ？ それはお互い様よ。わたしだつて、坂上くんがこんなに図々しい人だとは思わなかつたわよ。

「ず、図々しい？」

そうよ。だつて人が眠つてゐる時に入つてくるなんて、チカンじゃない。変質者よ。

「いや、だからそれは……」

何よ？ 何か理由でもあるつてわけ？

「あー、一から話した方がよさそうだな……」

そうしてもらおうじゃない。せつかくの日曜日をこんなことにされたんだから。

ちゃんとした説明をして。

「えーっと、僕が死んじゃつたことは知つてゐるよね？」あつさうと坂上くんは言つた。

し、知つてゐるわよ。てか、昨日葬式に行つたんだから。

「だから、今の僕が何なのか、自分でもよく分からないんだよ。僕

は正美。でも、僕は死んだ。そのことは自覚してるんだけど……じゃあ、今の僕はなんだ、って感じで」

確かに、科学的にはあり得ない存在よね。今あなたが、本当に坂上くんだとするならば。

「うふ。まあ幽霊ってやつじゃないかな?」

「ず、ずいぶんあつらつとおのづかね。おのづかね。

「ま、それ以外の言葉が見つからないし。俗っぽい表現だけだ」

それもそうね。

よし、一つ田の謎が解けた。

死んでしまったはずの坂上くんがわたしに話し掛けられるのは、
彼が幽霊になつたから。
つて、それでいいのだろうか。

「……田中さん。先に進めなによ」

「……うーむ……。まあ、話を進めて。

「で、僕は記憶が曖昧なんだよ」

記憶が曖昧? どうこういふ」と?

「うふ。例えば……自分が“坂上正美”だったことや、島田さんと
同じクラスだったとか、そういうことを覚えてるんだけど」

うん。

「どうして死んじゃったのか。それと、死ぬ前に何をしてたのか…
…どうしても思い出せないんだよ。普ツツリと記憶が途切れてるわけじゃないんだ。途切れたその断面は曖昧で、僕はどこから記憶を無くしたのか分からんんだよ」

記憶喪失……なのかしら?

「あは、記憶以外のものもいっぱい喪失しちゃったけどね。身体とか」

いや、笑えないわ。

「どうして死んじゃったのか、本当に分からんんだ。何となく、僕は“死んだ”ってことが漠然と分かるだけで、死んだ原因も、実はよく分からんんだ」

ああ、それなら知ってる。又聞きの又聞きになっちゃうけど、自転車に乗ってる時に曲がつてくるトラックに巻き込まれた、って言つてたわよ。

「トラックか……」

何か思い出した?

「全然。だつて、道を走つてた記憶もないし」

うーん。じゃあ、この事は後回しにしましょ?

「やうだね

じゃあ一つ目の謎。理由は何にせよ、坂上くんの意識はここにある。でも、何でわたしの所にやつて来たのよ？ 親御さんとか、仲の良かつた男子とかの所に行けばいいじゃない。

「あー、それは僕も謎なんだよね」

「な、何ですって？」

「さつさも言つたけど、記憶がどこで無くなつてるか曖昧なんだ。それで、僕、気が付いたらこの部屋にいたんだよ。そのときは、自分が何であるのかよく分からなかつたけど……」

うん。

「君の寝顔を見た途端、ああ、僕は坂上正美で、この人は島田さんなんだ、つてことが蘇ってきたんだ」

「何でわたしなのよ？ そもそも、なんでわたしの部屋にあなたがいるの？」

「よく分からぬけど……」

「けど？」

「ソレから僕の推測だから、確証はないけど

いいわよ、聞かせてみなさい。

「死ぬ前の僕には、この世に未練があつたんじゃないかつて思つ

み、未練？

「うん。だから、現に成仏できていない」

「うーん。そういうものなのかな？」

「突然だけじ島田さん。君、葬式で名前を呼ばれなかつたかい？」

え、本当に突然ね。

「あ、『じめん』

……確かに呼ばれたわ。佳奈つて覚えてる？　あの派手な子よ。あの子に大声で呼ばれたわ。恥ずかしかつた。坂上くんの『じめん』親にもすごい睨まれ……あつ。

「ん、どうしたの？」

わたしは思い出した。あのときの、坂上くんのお父さんの驚いたような顔。そして、坂上くんのお母さんの睨み殺さんばかりの視線を。

死んだ息子の名前を呼ばれたら、そりやあビックリするだらう。

な、何でもないわ。それより、それとこれがどう関係があるの？

「うん、僕が思うに……島田さんと僕の名前が同じだつたことが大きな意味があるんだ」

わたしと坂上くんの名前が？ それ、どうこいつ意味よ？

「これは僕の推測だけど……」

分かってるわよ、早く言こなさいよ。

「魂だけになつた僕は、いまだに未練によつて成仏できなつて彷徨つていた。自分の身体を求めて、葬儀場の辺りをね」

あの葬式の最中。わたしの頭の上を、坂上くんの幽靈がうるさいつくりしていたのだろうか。

坂上くん自身その時の記憶を失つてしまつてゐらしくないので、確かめようがないけど。

「だけど、僕の魂が收まるべき身体は、もう使えないものになつてしまつていた」

「そうね。それが普通よ。だから魂は天に召されてしまうのよ。

「そう。仕方なく諦めようとした僕だけ……」

だけど？

「自分の名前を呼ばれたから」

「正美ー。」と大きな声で叫ぶ佳奈を思い出す。確かにあのとき、心そこにならずだったわたしも、呼び寄せられるように我に返つたのだ。

「君に、取り憑いてしまった

と、取り憑く？

「うん。こんな話を聞いたことがある。名前つてのはすげ〜強い力があつて、時には何か 例えは、靈とか魂とか を呼び寄せ、それをとどめておくことができるらしい。名付けっていうのは、混沌とした世界から切り離す作業らしいんだ。ほら、赤ちゃんが生まれたら、まず名前をつけるでしょ？」

分かるような、分からぬような……。

「まあ、僕の推測だからさ。確証は全然ないよ。でも、こうでも考えないと、僕がここにいる意味が分からぬんだよ」

それで？ どうして取り憑くなんて思ったわけ？ 当時の坂上くんは。

「たぶん、取り憑くつもりはなかつたんだと思つ

どういう意味？

「僕の魂が収まるべき身体はなかつたけど、収まるべき名前だけは……そこにあつた。普通、名前と身体は一緒の運命だから、身体が死ねば名前も死ぬ。そつやつて普通の人は消えてゆく。だけど、僕の場合は」

わたしの名前、つまり、正美といつ名前が、たまたまそこにあつた。

「うん。そして僕は素直に自分の名前へと帰ろうとした。だけど当然のことながら、それは僕の身体じゃなかつた。僕が支配できる身体ではなかつた。かと云つて、IJKのまま無に消えてしまつてしまつし。何らかの未練があつたから」

そ、それつて。

「そう、だから僕は、こんな中途半端な状態で現世に残つてゐるんじゃないかな？」

「じょ、冗談じゃないわよ。出て行きなさいよ。気安ぐ居座らないで！ わたしの身体は、公園のベンチじゃないのよ？」

「それが、無理みたいなんだよ」

な、何でよ？

「何度も試したけど、僕は君から離れることができないんだよ。この部屋の中……もつと言つなら、君から半径一メートル以上外に出ようとするとい、何かに引っ張られてるみたいになつて離れられないんだ」

「うわ。

「IJKの期に及んで嘘は付かないよ」

「じゃあ何よ？ 取り憑くだけ取り憑いといつて、後は離れられないこと？」

「やうなるかな」

ふ、ふざけないで。じゃあ、わたしは一生坂上くんに付きまとわになきゃいけないわけ?

「それは……僕にとつても辛いんだよなあ」

他人事みたいに言わないでよ。わたしは坂上くんと違つて、
まだまだ前途ある身なんだから！

「わかれはわれこの言葉で……」

わたしは愕然とした。これからわたしの人生、一体どうなつてしまふのだろうか。

坂上くん…………お願いだから出てつてよ。

「いやあ、だから僕も、できればそつしたいんだよ。早く成仏した
いんだよ」

どうして？死んじゃつてからもいへつていられるなんて、何だか、すゞくズルいような気がするのに。

「……まあ、そんなにいいものじゃないよ」

そうなの?

「試してみたけど、僕はこの世界のものに手を触れることができない。ほんやりとしか感じることもできない。僕の声は、たぶん、君

以外には届かない」

わたしに坂上くんの声が聞こえるのは、取り憑かれてるから、
なのかな。

「たぶん、そうだと思つ」

うーん。

「僕には会いたい人もいるし、もう一回だけやりたい」ともある。
そりや、未練なんて探せばいくつでも見つかると思う。だけど、も
ういいんだ」

びつして?

「例えば犬じやないけど、腹ペコの時に『おあずけ』で食べられな
いことほど辛いものってないだろ? つまり、僕は永遠に『おあ
ずけ』なんだよ。そう考えたら、早くこんな世界からは抜け出した
い。心の底からそう思つよ」

坂上くんの言葉を聞いてるうちに、だんだん坂上くんの置かれて
いる不幸に気が付いてきた。そして 死ぬのはもちろん辛いこと
だろうけど 坂上くんのような“半分生きてる”状態がどんなに
恐ろしいのか、わたしにもおぼろげながら分かつてきた。

こうやって話ができるのに、わたしと坂上くんが生きているのは、
全く別の世界なのだ。

だつたら、坂上くんの魂をこの世に引きとじめさせた“未練”つ
てのは何だつたのだろう。

坂上くんが成仏できずにいるのは、その“未練”的所為のはず。こ
んなに辛い状況を乗り越えてでも坂上くんがやり遂げたかったのは、

一体どんなことなんだろうか。

あ、そうか。

「お、察しがいいね

「そりよ。その“未練”がなくなれば、坂上くんも成仏できるはず。

「そう、僕はそれが言いたかった

なるほど、つまり。

「その時まで『よひじぐ』って言ひたんだよ。僕は

「そりか、これで二つ田と三つ田の謎が解けた。

偶然、わたしと坂上くんの名前が同じだった。そのおかげで、魂だけになつた坂上くんは、わたしに取り憑くことができた。まるで非科学的だけどね。

だけど、どうして取り憑いたのかを坂上くんは覚えていない。記憶を失つてしまつたようだ。誰か他人に取り憑いてまで、この世に固執した理由が分からぬ。

ということはつまり、わたしから坂上くんを追い出すためには、その理由を探せばいいんだ。

「よ、『よひじぐ』

て、番号に言わないでよ。

「あはは、『よひじぐ』

つまりいつな？ 坂上くんがこの世に残した“未練”。それをわたしが調べてあげれば、坂上くんは成仏できる。

「うそ。やつこいつになると悪い」

驚きと困惑ことこの闇の中、ゆりやく一筋の光が見えたよつな気がした。それはぐく頼りなく細い光だつたけど、真つ直ぐに前に向かって指していた。これを頼りに進んでいけば、あつと出口が見つかる。そう思った。

……まあ、それにしても、いろいろと疲れた。

「まあ、限りなく非日常的な話だからね」

ね、一つい？

「何？」

坂上くん、わたしの声が聞こえるのよね？ 言葉に出してない声も。まあ、心の声とでも呼びましょうか。

「ああ。まあ、何となくだけどね」

どんな感じに？ 全部のことが手に取るよつに分かってやつの？

「いや、それはないな。耳をすませば聞こえてくるよつな感じだよ。生きてた頃には、手のひらを丸くして耳に当つたりしてたけど、あれをする感じかな」

じゃあ、あんまりわたしの中に入っこないで。お願ひだか
ら。

「うそ、そのつもりだけど」

良かつた。坂上くんがいい人で。

「取り憑くような奴が、いい人かな？」

坂上くんの言葉に、わたしはあははと笑った。

でも、やっぱり不公平よね。

「え？ 何が？」

わたしには、坂上くんのことが分からないんだから。
見えないし、坂上くんが黙り込んでいたら、そこにいるのかすら
分からなくなっちゃう。

「ああ、そうだね」

じゃあ、ルールを決めましょ。

「ルール？」

いつまでになるか分かないけど、これから一緒に暮らすん
だから。ルールくらいは必要でしょ？

「なるほど」

わたしが坂上くんに用がある時は、わたしの方から呼び掛けるわ。だから、むやみにわたしの心の中を覗かないでね。

「分かったよ

本当？ ずいぶんと物分かりがいいじゃない？

「うん、だつて島田さんの機嫌を損ねたら、調査をしてもひえなくなっちゃう。そしたら僕、成仏できぬいじゃん」

「ふつ、おかしな関係よね。わたしたち。坂上くんは自分を消してもういために気を遣つてるけど、坂上くんが消えないと困るのは、わたしだつて一緒なのよ？」

「あは、世界中で一番おかしな関係だろうつな」

「じゃあ、わたしから話がある時は、坂上くんを呼ぶね。

「あ、ちよつと声を出してくれない？」

声？ 別にいいけど。

「何？ 坂上くん」
「あ、やつぱり」
「え？ 何が？」
「島田さんが心の中で思つよつ、言葉にしてくれた方がよく聞こえるや」

へえ、不思議ね。今までに起きた数多くの不思議の前では、

かすんで見えるナビ。

「やつぱつ、なるべく島田さんの心の中を覗きたくなからせ、用があるときは言葉に出してよ。それの方が僕も気付かやすこと思つから」

「分かったわ。……でも、周りから見ると独り言を言つてゐるよつて聞こえるのよね。わたし」

「ああ、それがあつたか」

「二人きりの時は言葉で話せるけど、周りに人がいる時は心で話しましょ」

「やつぱつとおいつか」

「ええ」

「言葉と心。一通りの『ヨコ一ケーション』がわたしたちには用意されてゐる。まあ、坂上くんは言葉の方は使えないけど」

「でも、やつなると問題が一つあるな」

「何?」

「人が周りにいる時は心で話さないといけないことは、僕はずつと島田さんの心の声に耳をそばだててないといけないといふことでしょ?」

「あ」

「やつなると、やつき決めたルールが守れなくなっちゃう。矛盾だよ」

「うーん……」わたしは少し考え込んだ。「あ、簡単よ」そしてすぐこひらめこした。

「え?」

「人がいる時も、言葉で呼び掛ければいいのよ。その言葉を合図で会話を始めれば。もちろん心の方でね」

「やつか、なるほど」

「名案でしょ」

「あー、でも一つ問題があるな」

「何よ? ケチ付ける気?」

「ほり、例えば教室とかで僕を呼びたい時や、『坂上くん』とか言葉に出しちゃうと、みんなが驚くような気がするんだよな」

「あ……」

一理ある。

「じゃあ、合意言葉を決めましょ。その言葉をきっかけに心の会話を始めるってのはどう?」

「合意言葉か、いいね」

「何にしようかな。別に何だっていいんだけど。

ふと窓の外に田をやると、今日はとてもいい天気だった。透き通るような青空に、真っ白い雲が一いつつ流れていた。こんな天気の田にお昼まで寝てるわたしが、やつぱり罰当たり?

「じゃあ」

よし、合意言葉決定! 安直でいいのよ、こんなものは。

「わたしが『本日は』って言ひか」

「ふむふむ」

「坂上くんは『晴天なり』って返して」

「なるほど、それが心の会話を始める合意図だね」

ええ。

「よし、分かった」

取りあえず一段落が付いた。わたしはプライバシー権を獲得することに成功した。坂上くんと決めたルールによつて、心の中を覗き見られることはなくなつたと思つ。まだやらなければいけないことも、分からぬこともたくさん残つてゐるが。

「つーむ、じゃ、テスト。

「本日は?」

すぐさま坂上くんの声 大気の振動によつて伝わるのではなく、ダイレクトに心に響く声が返つてくる。

「晴天なり」

おつけー? 坂上くん。

「うん、こんな感じで会話始めればいいんだね。人前では」

そうね。

「島田さんの声が聞こえたらすぐ返事をするよ」

よろしくね。

「おつか」

とまあこんな感じで、坂上くんの靈に取り憑かれたわたしの生活は大きく変わつてしまいそうだった。いつまで続くのか分からぬけど、昨日までとはまるで別の生き方をすることになるだろ?、わたくしは。

でも、それは坂上くんにとつても同じことか。死んだことによつて、過去とは全く違つた生き方を始めることとなつた。自分が生きてきた足跡を辿りながら、坂上くんは何を見つけるんだろうか。

……よし、今日はもう寝よう。明日のことは明日考えよつ。

わたしは布団へと潜り込む。そんなわたしの行動を見ているのだろう。坂上くんがの呆れた声が聞こえた。

「て、よく寝る子だね」

「いのち。明日からは頑張るわよ。

「……じめんね」

へ？

「やう言えど、まだ謝つてなかつたよ。本当にじめん。僕がどうして取り憑いてしまつたのかは思い出せないけど、島田わんには悪いことしたなつて思つてるよ」

べ、別にいいわよ。何だか、面白ことになりそうだし。

「はは、ホントに氣楽な意見だな」

そんなこといつつ、調査してあげないわよ。

「ひえ」

ふふ、飼い殺しね。

「……もう死んでるけどね」

坂上くんの笑えないギャグを最後に、わたしたちは会話をおしまいにした。明日からは学校が始まる。学校に坂上くんを連れて行ったら、みんなはどういう反応をするのだろうか。もちろん、坂上くんの姿はみんなに見えないけれど。

布団の中でわたしは、「くくつ」と笑いをこらえた。

かくして、わたしたちの奇妙な共生生活はスタートしたのだった。

第一話 正美、取り憑かれる（後書き）

初めまして。ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。
感想などいただけると非常にありがとうございます。

「正美、登校する」

朝になつた。今日は月曜日。今日から学校が始まる。月曜の朝、目覚めの時。一週間の中で一番気が滅入る瞬間だ。わたしはゆっくりと起き上がる。そして大きなあくびを一つ。二つの瞳に涙がたまつて、視界が雨の日の窓ガラスのように滲んで見えた。

ベッドから立ち上がり、カーテンを開ける。すると、とつさに差し込んでくる朝の光。体温がじわっと暖められる感じがした。今日も朝からいい天気。

「本日は……」わたしはつぶやく。

すると、待つてましたと言わんばかりに、

「晴天なり」

わたしの心は、彼の声によつて軽く振動した。心の中で、わたしも彼に言葉を投げ返す。

おはよ、坂上くん。

「おはよう」

いよいよ、学校へ行くの。

「そうだね」

「どう? 何か感想はある?」

「感想といわれてもね……」

まあ、複雑な気分つてところね。

「そうだね。まあ初めてのことだから、死んじやうのつて

ははは、坂上くらしい意見ね。

「そうかな?」

わたしはクローゼットを開き、制服をハンガーと取り出した。
そして、パジャマのボタンに手を掛ける……。

じゃあ、今からプライベートね。

「了解」

それっきり、坂上くんの声はしなくなつた。

これは昨日のうちに決めておいた約束。

わたしがお風呂に入る時、トイレに行く時、そして着替える時
これが大問題であることに気付いたのは、夜になってからだつた。
我ながら間抜けだつた。いくら姿が見えないからと言っても、声
が聞こえる人にそれらの様子を見られるのは耐え難い。そりや、わ
たしだつてお年頃の女の子ですもの。
さて、どうしよう。

そう考えたときに役立つたのは、例の合い言葉だつた。

どうやら坂上くんは、強く意識をしないとわたしの声も姿も分か
らないらしい。だから悪いけど、わたしが“プライベート”な時は
意識を消していくつもりおづ。そういうことになつたのだ。

わたしは着替えを終了する。

ただの寝ぼけた島田正美から、明日葉高校2年3組24番島田正美へと変貌を遂げたのだ。なんちやつて。

ここで登場するのが、今い明日葉。

「本日は……」

ややあつい、

「晴天なり」坂上くんの声。

はい、お待ちおねさま。

「いやいや、たいして待つてないよ」

いやね、形式上よ、形式上。

「何だ」

わたしが気を遣わなくちゃいけないなんて、そんな不条理なことはないでしょう？

「それもそうだね」

わたしは部屋のドアを開ける。

いつものドア。

今まで何百回と開けたドア。

でも、今日は違う。

だって、坂上くんと一緒に開ける、初めてのドアだから。

「……何か詩的な表現だね」

「うぬやー。」

わたしは支度を済ませて家を出た。玄関を出るとき、お母さんが珍しく表まで見送ってくれた。今日に限りてどうしたのかな、って思つたけど、お母さんの言葉を聞いてすぐに納得することができた。

「正美……何で言つたらいいのか分からぬけど、あまり気にしちや駄目よ」

「へ？」

「クラスメイトが」「くなつたんでしょう？ 気にあるなつて言い方は変だけど、動搖してるのはあなた一人じゃないのよ」

ああ、なるほど。坂上くんのことで、わたしが思い詰めてるんじやないかと思つたんだ。お母さんつたら、心配性なんだから。

「何かあつたら、何でもお母さんに話してね。相談に乗るから」「う、うん」

でも、そんな気遣いが嬉しかつたりする。

「じゃ、行つてくのね」

「……気をつけてね」

わたしは駆け出した。

学校までの通学路。徒歩で約7分。自転車を使えばもつと早いん

だけど、うちの学校の規則で、家が近い人は自転車は使つてはいけないらしい。まあ、遅刻しそうになつたらそんなの構つてられないけど。

しばらく歩くと、またわたしの中で声が聞こえてくる。

「いい母さんだね」

やつぱり聞いてたんだ。

「あ、『めん』

いや、そういう意味じゃないけど。昨日言つたわよね？

「何を？」

心の声よりも、口に出した声の方がよく聞こえる、って。

「ああ、確かにやつだ。やつ言つたよ」

だから、わたしとお母さんの“声”での会話は、坂上くんに聞こえるんじゃないかなって思つて。

「なるほど。実際、島田さんの声はよく聞こえたから

「うーん、これは大きな収穫ね。

「どうこう意味？」

例えば、わたしが他の人から坂上くんについての情報を聞くとするじゃない？ そんな時、いちいちわたしが坂上くんに伝えな

くても、坂上くんが反応できるのよ。

「あ、そうだね」

わたしが通訳をする手間がなくなるわけね。これは大きいわよ。これから、どんどん坂上くん情報を集められる。

「あはは、探偵みたいだ」

名探偵、正美ちゃんね。

「じゃあ僕は有能な助手つてとこひかな?」

いや、坂上くんは違うわよ。

「へ?」

だって、坂上くんは依頼主でしょ?

わたしは朝日で満ち溢れているいつもの通学路を歩き続けた。家から近いからなんて理由で決めてしまつた高校までの道のり。だから今まで、誰かとおしゃべりをしながら歩くなんてことはなかつたけどね。

ねえ坂上くん。

「何?」

確か、断片的な記憶しかなじつて言つてたわよね。ちょっとテストしましょう。

「テスト？」

「ほら、坂上くんがどれくらいこのことを覚えてるのか、とか。
もしかしたら何かヒントが見つかるかもしれない。未練に思ひへり
いな」となら、記憶に残ってる可能性もあるでしょ？」

「ああ、なるほど」

「じゃあ、あなたの名前は？」

「坂上正美」

「わむ、聞くまでもないけどね。

「いや、あながち…… そつとも言ひ切れないんだよね」

「ほえ？」

「今は自分のことを“坂上正美”だって理解できる。でも、始めの方はそういうやなかつた。自分自身の存在が、まったく分からなかつたんだ」

「ああ、確かにそんなことを言つてたわよね。わたしの寝顔を見て
いるわけ、わたしのことと自分のことを思ひ出したって。

「やうなんだ。もしも何も分からなかつたら、僕は島田さんに話し
掛けになかったと思う。どうして思い出したのかは分からなけれど
……」

まあ、不思議なことも次々と起る」と慣れちゃうものね。「どうして?」なんて思つてたらキリがないわ。

「やつかな

「そつよ、そんなもんよ。だつてやつじやない? 今、わたし
が生きてることだつて……」「どうして?」なのよ。説明なんかで
きないわ。この地球つてものが宇宙に存在しているのだつて、「ど
うして?」でしょ? 頭のいい人は一つの答えを知つているのかも
しれないけど、「どうして?」だけは消えることがないと思うわ。
答えを見つけるつてことは、次の「どうして?」も一緒に見つけち
やつてことだから。

「なるほど、畠田さんって面白いね」

お、面白い?

「だつてさ、幽靈に取り憑かれたつていうのに……むしろ楽しんで
るんだもん」

た、楽しんでないわよ。

「あはは、嘘だ」

「ひるとい! 」 せうだつたら、坂上くんも相当おかしな人よ。
死んじやつたつてこつのに、ずいぶんと明るくふるまえるものね。

「やつ来たか……まあ、開き直つやつたのかな? 落ち込んでて
も何の意味もないからね」

なにか、楽しんでるのは坂上くんも一緒にしない。

「はは、ううだね。何だかんだ言って、僕たち気が合つかも」

「うむ……。

「まあここや。それよりも、話が脱線してゐる気がするんだけど」

「それもううね。じゃあ……坂上くん。

「はー

日本の首都は?

「……あれ?

ヒント、“と”から始まる都道府県。

「と、と、と……栃木?」

さんねーん。答えは東京よ。

「あ、東京! 何で忘れていたんだう……」

栃木は覚えているのにね……。じゃあ次の質問。信号機の色で、“止まれ”の合図は? あ、ほら、ちよつとそこには信号機があるじゃない。

わたしは歩行者用の信号を指差した。そこでは、赤い色をしたおじさんが“気をつけ”みたいな格好をしている。

「……「ひーん？」

ヒント、赤か青のどっちかよ。

「青だー。」

アートかレッドか？

「……」「めん」

“青は進め、赤は止まれ”。小学校で教わらなかつた？

「あ、そうだ！ 思い出した」

ホントに？

「ホントに。歩行者用の信号はないけれど、 “黄色は注意” だろ？」

正解。本当に思い出したみたいね。

「うん」

分かったわ。坂上くんは、記憶をなくしてゐわけじゃないのよ。

「じつこひじ？」

わたしが答えを出すとすくべに迷ひ出せなかつた……。さうして

したきっかけさえあれば思い出せているでしょ？だから、完全に記憶を失ったわけじゃないってこと。たとえるなら……引き出しの鍵をなくしちゃったみたいな状態かしら？

「なるほど……引き出しの中身には異常なしつてことだね」

そ、つまりそういうことだね。

坂上くんがわたしに取り憑いた原因 坂上くんが残した未練。
それを理解するためには、その引き出しを開けるための鍵が必要と
いうこと。その鍵を探し出すことが、わたしたちの取りあえずの目
標となつたわけだ。

「正美、登校する」（後書き）

ちょっと一話あたりを短めにしてみました。

「正解、慌てる」

ほら、学校が見えてきたわよ。

わたしは前方を指差す。

両側に住宅街を臨む先には、わたしが通う高校 私立明日葉高校がそびえ立っていた。最近設立された新設校なのだが、別に超進学校つてわけでもスポーツに力を入れてるつてわけでもない。平凡でなんにもないわたしの生き方を象徴してるような学校……。あ、こんなこと言っちゃうと失礼かな。良いところもたくさんあるのよ？ ほら、家から近いとか。

じゃあ、また質問ね。坂上くんが通っていた高校の名前は？

「分かった、明日葉高校だ」

お、正解。

「やつた」

「ここまで至る道のりで、わたしはいくつも坂上くんに質問をした。そして分かったことは、坂上くんが覚えてる記憶と覚えていない記憶との境界線が曖昧だということだった。日本の首都は覚えていないのに、埼玉県の県庁所在地は覚えていた。担任の先生の名前は分からなかつたけど、数学担当の教師については、奥さんの名前まで覚えている。

今の高校名も加えると、正解率は30%くらいだろうか。野球の打率くらいだ。

教室に行つたら、もつともへいじを思つて出すかもね。

「そだね」

思えば……わたしたちがこれから歩いつとじてるのは、坂上くんがかつて歩いていた道なのよ。だから、坂上くんの落とし物がいつぱに見つかるはず。きっとね。

「なるほど。なんだか楽しみだ」

あはは。教室に行けばクラスメイトにも会えるわよ。坂上くんの未練の引き出しを開ける鍵、もしかしたら誰かが持つてるかもしれないわね。

「それを願いたいね……。あ、あとで、島田さん」

ん？ 何？

「えーっとね、なんて言つか……」

「どうしたの？ 何か言つたりやつね。

「……」も変だけど、島田さんがあんまり明るいことや……みんな惑つるじやないかな？

え？

ちょっと驚えてわたしは気付いた。

鏡を見なくても分かる。今のわたしの表情は、とても島田前にクラスメイトを失つた女の子のものではないだろう。

坂上くんがわたしの中にやってきてからずっと忘れていたけど、坂上くんは死んでしまったんだ。

なるほどね、みんなへの配慮も考えなくちゃ。

「そうそう。……ま、当の本人の僕が言つのも変だけどね。『坂上くんが死んじゃったんだから、もっと慎む態度でいなさいよ』って

あはは、坂上くんの所為よ。わたしが笑つちゃうのは

「そっか。やつぱり僕たち、変な『コンビだね

改めてそう思つわ。

わたしが苦笑いを浮かべていたとき、向こうの方で手を振つてゐる女子生徒がいるのに気付いた。

ほら、そつそくお出ましよ。鍵を持つてるかもしれない候補者がね。

わたしは彼女の元へと走り寄る。校門のところでわたしを待つてゐる。

吉崎佳奈。ウェーブ掛かった茶髪は今日も健在だった。どこでもいそうな、いわゆる今時の女子高生。ただ、ひとくくりにされるのは大嫌いらしい。わたしにはそれがどうしても分かんない。みんなが持つてるものとか、流行つてるものが大好きなのにな。

「正美、おはよ」彼女はスーパー・ボールが弾むような口調で言つた。

「おはよ

「ねー、ビックリしちゃつたよね

たぶん坂上くんのことだらけ。

「う、うん」

「なんてゆーか、まー、ね」

「何?」

「んー、何でもない」

いつも思つんだけど、ホントにこの子との会話には脈絡がない。
まあ、複雑な心境は分からなくもないけど。

「本日は……」

「へ?」

わたしのつぶやきに、佳奈は虚を突かれたような顔をする。

「ん、何でもないの」

あなたに對して言つたんじゃないから。
佳奈はまだ解せない表情をしている。

「……晴天なり」少し遅れて、坂上くんの声が聞こえた。

「坂上くん? いますかー?」

「ちやんといるよ」

いつもより返事が遅かつたから。

「だつて、島田さん他の人と話してたからで、僕に振られるなんて

思わなかつたんだよ

「冗談よ、冗談。

「で、何の用？」

「うん、」のトの「」。わたしの田の前にいる彼女の「」と、覚えてる？

「知つてる。吉崎なんだ」

意外。

「とにかく、昨日のつむぎで思つて出したがつたんだよね

あ、そつか。

わたしは思い出した。昨日の会話の中に、佳奈の名前も出ていたんだ。思えば、坂上くんがわたしの中に入り込んでしまった原因の一つに、今の段階では坂上くんの憶測だけど、彼女がいた。佳奈が葬儀の場で「正美！」と大きな声で呼んだ所為で、坂上くんの魂はわたしを居場所だと勘違いしてしまったのだ。そしてそのあと、坂上くんは記憶のほとんどを無くしてしまった……。

びびっ、彼女を見て何か思つて出さない？

「うーん……。吉崎さんとはあまり話せなかつたしな……」

それはわたしたちも同じでしょ？

「わつなんだよね」

不意に、わたしは肩を叩かれてしまった。

「ねえ、正美つてば」

あ、じゃあちよつと待つて。

「了解」

わたしは佳奈の方へと向き直る。自分では意識してない「わつ」、彼女に横顔を向けていたらしい。そこでは、佳奈が不審そつな田つきでわたしを見つめていた。

「あ、わつしたの？」

「わつしたもこわつしたもなこわよ」

佳奈は不機嫌そうな表情になつていた。高校球児よりも焼けた正確には、焼いた、か 小麦色の肌。長いまつげ。目元にも軽くシャドーが乗っている。スッピンのわたしの顔を横に並べると、やつぱり化粧をした彼女の方が大人っぽく見える。でも、佳奈が化粧を落とすと、それはそれで垢抜けた感じになつて大人びて見えるのだ。不思議。

「急にそつぽ向こちやつて。まつとなんか見上げひやつして」

「え、ホント?」

「マ、ジ、で」

きつと坂上くんと会話をしてた所為だらう。心の中の声を聞くのに必死になつて、わつせり外つづらはおろそかになつてしまつよつ

だ、わたしは。

そう言えば坂上くんと話している時に第三者がいるなんて状況は初めてだ。また一つ、発見をすることができた。坂上くんと話すとき、わたしは自然に上を向いてしまつらじー。

ほら、なんとなく幽霊つて浮いてるイメージがあるじゃない？ その所為かもしないわね。

「んー、まあ、それはいいとして」

「うん」

「シバセンに言つとこで。あたし、保健室にこまますって」

「何よ、またサボり？」

シバセンとは、うひらの担任の柴原先生のこと。決して、司馬遷ではない。佳奈のサボリ。口実はいつもこれだ。

「だつてさ……ヤジayan。正美はヤジやないの？」

「へ？ 何が？」

「あんたつてホントいい性格よね」佳奈は呆れたように苦笑いを浮かべた。

「だから、何よ？」

ちょっとムツとしたわたし。ほっぺを膨らましてみる。坂上くんによく「面白」ことと言われちゃうのも、少しほは影響していたのだろう。

「雰囲気よ、雰囲気。あたしみたいに繊細な人は耐えられないの」「何の雰囲気よ？」

「まだ分からないの？」 坂上くんが 「

そう言いかけて、佳奈はやめた。

わたしの表情がハツと上下に広がるのを見たのだろう。

「そ、そっか

「……インイン、メツメツつてやつ？ 驄目なのよ、あたし。おと
といのお葬式もヤバかった」

確かに、彼女とああいつたしめやかな雰囲気とはまさに水と油だ。
でも、纖細とはちょっと違う気もするけどね。

「てなわけで、気が向いたら顔出すから。じゃ～ね～

佳奈は校門からどこか別の方向へと走り出してしまった。もう夏
も終わり秋の入り口に差し掛かろうとしているのに、彼女のスカー
トは一向に長くなる気配がない。それでも、あんなに大股で走つて
いるのに……見えない。うまい、とわたしは感心する。

てなわけで、一人の知り合いが台風のように過ぎ去つていった。

校門の前、ぽつんと残されるわたし。

そして、つぶやく。

「本日は？」

今度はさつきよつも早く、

「晴天なり」坂上くんが反応してくれた。

あ、くると思つてた？

「そりや、ね」

瓶に呑した薬葉は聞いべるんだもんね。

「うそ、何となくだけね」

あ、何となくなんだ。

「えーっと…… 鹿田さんの声はやかましくて聞いべる」

失礼ね。

むしろ、瓶がばかでかいのは佳奈の方なのに。

「吉崎さんの声は、やつぱり何となくだつたな。お風呂の中から話してゐみたいな」

なるほどね。わたしと坂上くんは、心が通じ合つてゐる分だけよく聞こえるのかしら。

少し考えて、わたしなどもなぐ変なことを言つやつた気がした。

あ、いや、やつこひの意味じゃないのよ。 なんてやーか……
その、ね。

「あせせ、どうして荒れるのね~」

あ、べ、別に、慌ててなんかいわよ。

たはは、これは困つたと思つた。心の中の余話つて、思つたことがそのまま相手に伝わつちゃう。わたしを一つの工場としたとえ

るなら、製品のチックなしで出荷されてしまうのだ。

「ん、まあいいけどね。現に、僕と島田さんは心で通じ合っているわけだし」

「ん、んー、まあ、そうだけど、そうだけどね。

「だったらどうして腑に落ちないような表情してるので?」

「だ、だつて……。

それってなんか、恋人同士みたいじゃない。

正美、教室へゆく（前書き）

少し間が空いてしまいました。評価をしていただけるとありがたいです。w

正美、教室へゆく

さて、教室のドアを開けてまず驚いた。坂上くんの席つて、窓側の列の前から三番目なんだけど、いつもだつたら全然分からなくてか気にもとめない。

でも、今日は違つた。教室の中に入るなり、あれが坂上くんの席なんだとすぐに分かつた。

花瓶が置いてあるのだ。白い菊の花。

「本日は？」

「晴天なり」

とうとう来たわね、教室。

「うん、そうだね」

分かる？ あれが坂上くんのいつも座つてた席よ。

「……うん、何となくそんな気がする」

ちょつと近寄つてみる？

「何だか怖いな」

あはは、怖じ氣づいてどうするのよ。

「」Jの教室の風景にも見覚えがあるよ

だんだんと記憶が蘇つてきたのね。

取りあえず、わたしは自分の席に着くことにした。まあカバンを持ったままダイレクトでの花瓶のある席に向かつたら、みんなに何て思われるか分からない。

わたしは座り慣れた椅子へと腰掛ける。そう言えば学校の椅子つて、みんな同じに作つてあるはずなのに、何故か自分の椅子じゃないといつくりこなくなつてくるのよね。どうしてかしら。わたしがカバンを脇に掛け終わると、後ろの席から声が掛かつた。

「正美ちゃん、おはよう

「おはよう

彼女は、わたしの友人の一人。名前は……。あ、そうだ、テストに使つちゃお。

「本日は?」

「え、何?」

「あ、なんでもないの。あはは……」

笑つて誤魔化すわたし。佳奈の時と同じだ。

「晴天なり」

坂上くんの声が聞こえたので、わたしは苦笑いをやめた。

「島田さん、合い言葉を挟むタイミングが下手だね。これじゃ合い言葉を決めた意味がないじゃん」

「う、うるさいわよ。

「アレだね。思つたことすぐやひつかつタイプでしょ？」

そ、そんなことないもん。

でも実際のところ、図星かも。

「まあいいや。で、何の用？　だいたいの想像は付くけどね」

「このことは覚えてる？」

わたしは両肘を机に置いている彼女をちらりと見た。佳奈ほど派手じゃないけど、暗い子じゃない。むしろリーダーシップがあって、はきはきと物事を言える人間だ。家庭科で使つ裁ちバサミみたいに、何でもザックリと切れる性格。

「…………うーん、じめん」

謝ることないわよ。はい……。

「けい？」

坂上くんって、女の子手だった？

「ぐふー！　なにゆえー？」

あんまり覚えてないから、佳奈のこととも、千里のことわざ。

彼女は、名を浜松千里といつ。

「こ、苦手じゃなかつたと思つけい……」

ふふふ、「冗談よ。わたしだって、男子のことは何も分かんないもん。

「そ、そつか、「冗談か」

あれ？ 意外と真に受けちゃつたってことは……もしかして気にしてたのかもね。

「ねえ、正美ちゃん？」

ビクッとわたしは身をすくめた。どうやらわたしには反省というものが欠けているようだ。また坂上くんとの話で我を忘れていた。千里から見れば、自分との話の途中であさつての方向を向いて、しかも薄気味悪く微笑んでいる人にしか見えないだろう。

「は、はい！ 何であります？」
「どうしたの？ 何ていうか……その」

前述したとおり、千里は何でも真っ直ぐに示してくれる。変化球を知らないのだ。

「変だよ？」

「う、言われてしまった。弓道みたいにストーンとのを射抜かれてしまった。

「そ、そつかな？」
「うん、変」

千里は今日も長い髪の毛を後ろで束ねている。短くするとボーイッシュに見えるからいやなんだって。わたしは、そっちの方が彼女には似合つてると思つたんだ。

「どうしたの？」

「あ、いや……何でもないの」

実は幽霊が取り憑いちゃってね、その幽霊とお話をしたのよ。わたしがそんなことを言つたとして、わたしのことをもつと変だと思わない人はいない。きっとしない。しかも千里だし。誤魔化すしかないのだ。

「まあ……普通でいる方が無理だけじゃ」

千里は教室をぐるっと見回した。つられてわたしも見る。その雰囲気は、この前のお葬式の雰囲気を引きずっているかのように沈んでいた。普段なら女子も男子もペチャクチャと話をする声が聞こえてくるのに、今日はそんなことが許されるような環境ではなかつた。なるほど、佳奈が来たくなるのもうなずける。先生が来る前なのに全員が着席してゐるなんて、初めて見る光景だ。

「正美ちゃんだけニヤニヤしてて……変よ？」

「う……」

坂上くんに言われた通りだ。

素直にしまつたと思う反面、何でも坂上くんの言つた通りになるのが悔しい気持ちも湧いてくる。わたしは自分のことを、本当にひねくれてるな、と思う。

「あ、『めんね……わたし、不謹慎だったわよね』

千里はフッと口元を緩める。

「まあ、わたしに謝られてもしょうがないけど」

それもそうだけど。

千里は頬杖を付き、小さなため息を一つ吐き出した。

「やっぱり嫌なものね……一人でもクラスメイトがいなくなるのつて。そんなことは当たり前のはずなんだけど、実際に起つてみるまで分からなかつたわ」

たぶん、それは全てのクラスメイトが感じていることだろ。わたしはもう一度坂上くんの机の方へと目をやる。窓側の列の坂上くんの机。朝日が窓から射し込んで、例の花瓶がつやつやと輝いていた。

「あの花……」ふと、わたしは疑問を覚えた。
「ん？」
「誰が置いたのかしら？」

素朴な疑問だった。

千里はまた表情を崩す。

「わたしが用意したの」
「え、千里が？」
「何となくそんな気になつてね。まあ、一応先生にも相談したけど。喜んでたわよ、シバセン」

千里はいつもによく気付く。しかも彼女には行動力が伴つ

ている。

わたしだつたらどうだろうか？自分を少し遠くから見てみると、そこには情けない自分しかいなかつた。たぶん、何もしない今まで残つた月日を過ごしていただろう。坂上くんとは、わたしにとつてそういうふた存在だつたのだ。

もう一度、わたしは花瓶を見てみた。真っ白い汚れのないその花びらは、死者の清らかな安らぎを祈つてゐるよつにも見える。そう、生きている人間のすることは、死んでしまつた人間の安眠を願うことなのだ。そんなことを思つたら、坂上くんに対する気持ちも変わる気がしてきた。わたしの中から早く出ていつて、と思うよりも、彼が早く安らかになれますように、と思つた方がいいに決まつてゐるのだ。

わたしがそんなことを考へてゐると、教室の前のドアが静かに開いた。

教室の中へのそつと入つてきたのは、我らが担任教師の柴原先生だ。本名を柴原毅と言い、180センチ以上の巨体の持ち主だ。高校時代は柔道でけつこう有名な選手だつたらし。だが、性格にちよつと難がある。堂々としてれば威厳は勝手に付いてくるのに、いろんなことによたらおどおどしている。暴力も嫌いと言つていたし、声も小さい。ただ、根がいい人なので、生徒からの信頼はけつこうある。みんなから“シバセン”と呼ばれてゐるも、親しみの証拠だ。

「みんな……おはよ」

心なしか、今日のシバセンはやつれでいるよつにも見えた。いつもつやつやのほつぺも、潤いをなくしてゐる。

教壇の上でクラスを見渡すシバセン。

またしても、教室の中の空氣は張り詰めていた。

「今日は、よく登校してくれたね

あ、一人サボつてます。

「何て言つたらいいのかな……僕も正直、ビックリしたとしか言え
ないよ。教師になつて五年目になるけど、こんなことは初めてだか
ら」

シバセンはうつむきながら語る。象のようなその瞳には、もう涙
が潤んでいた。クラスの神妙な雰囲気はさらに加速される。何人化
の女子は、鼻をすするよつた音を立てていた。

「でも、それだけじゃ駄目だよな。坂上のためにも……僕たちは何
をするべきか考えよう。何かあつたら、いつでも相談してくれ。み
んなの悲しみは、先生も一緒に感じてるから」

顔を上げるシバセン。

「さて、じゃあ……いつまでもこんな調子ではいられないからな」

ずずつと鼻をすすると、シバセンは瞳を『じし』し擦つた。そして
黒い出席簿を開き、出席を取り始めた。出席番号一一番の男子の名を
呼ぶ。安藤くんが、湿つた声で返事をした。

.....

どうへ、坂上くん。

廊下にて。わたしは窓の外をぼうつと眺めている。真つ青な青空。
理科の実験で先生が硫酸銅水溶液を見せてくれたことがあつたけど、
ちよど同じような色をしている。その空に浮かんで、小さな雲が

漂つてこな。海を進む小舟のよう。

「うーむ、実はナツシが想いで出してきたらしい

お、やつたじゃない。

わたしが廊下に出たのには理由がある。

一つは、佳奈と同じ理由。あのような雰囲気には、やつぱり耐えられない。

もう一つは、坂上くんと話をするため。わたしの、坂上くんと余話をしている顔を他の人に見られるのは厳しい。何だあいつ？ と思われてしまうだろう。まるで、禁煙スペースから逃げるベースモーカーの気分だ。取りあえず、窓を向いてればどんな顔をしてても問題ないはず。

「シバセン、いたね」

うん。

「あんな熊みたいな人は忘れられないよ」

あはは、怒られるわよ。

「うーん……でも、いい」と呟いてた。僕は感動しちゃったよ

わたしも。シバセンのこと、ちょっと見直しちゃった。もつと頼りない人だと思つてたけど。

「だけどさ、何か複雑な気分だよ。当の僕があんな話を聞いたやうとね」

それもそうね。

「どんなリアクションすればいいのか分からないね。まさしく別世界のことなんだな、て実感しちゃったよ」

「うなんだね。坂上くんがいるべき場所は、この世界でないのだ。わたしと変な形で繋がってしまっているものの、こっちの世界へは干渉できない。坂上くんが大声で叫んだとしても、それはわたしの心にしか響かないのだ。」

「そして、わたしも同じような事態が起きている。」

「坂上くんとの世を結ぶ中間地點となってしまったわたしは、坂上くんの死を千里やシバセンのようには感じられない。」

「そう、わたしもまた、彼女たちとは違う世界を生きているような気分になっているのだ。」

「でもさ、予想はしてたけど」

「うん。」

「みんな、暗いね」

「そ、そりゃそうよ。」

「今更ながら、坂上くんって、何かが足りてないような気がする。気の所為なのかもしれないけど、感覚がズレてるような感じが否めないのだ。」

「もつとも、わたしは生前の坂上くんをほとんど知らないし、それ以前に、対象比較のしようがない。自分の死について周囲が悲しんでいる時にどうこう反応をするべきなのか、を。」

人が死ぬつてこののはやつてこのことなのよ。

「つーむ、すいぶんと上から語るね」

何よそれ。嫌み?

「やうじやないけどわ」

坂上くんがわたしの中にやつて来てから、今までこんなムードになつたことはなかつた。わたしと坂上くんの意見がぶつかり合つているのを感じる。

でも、坂上くんが何をこだわつてゐるのか、わたしにはおぼろげながら分かる気がした。

今のわたしが気に掛かつてゐるのは、坂上くんのひょうひょうとした態度。だけど、坂上くんにとつてはそれが普通の神経なのだ。現世と切り離された坂上くんにとつて見れば、みんなの落ち込んだ様子はなんにも心に響かない。それは坂上くんにまだ意識があるから、とかそういう理由じやなくて、もつと深い意味で。

もう別世界のこととなつてしまつたから、関わり合おうといつて意識が枯れてしまったのだ。

……人が死ぬつてこつのは、やうこつことだから。

「ん、まあいいや」

ケンカしても始まらないしね。

死んでもいなのに、わたしは坂上くんの気持ちが分かる気がする。坂上くんの言う通り、わたしたちはやつぱり気が合つのかもしけない。分かつてゐるから、むしろ、わたしの意見との衝突が起きてしま

うのだ。わたしは、坂上くんとの立場が違つかい。

「で、これからどうする?」

「一そ、どうしよう。行動を起こすことは叶わぬが
するけど。

「やうなんだよね」

ショックから立ち直るのに、数日という時間は短すぎる。今のみ
んなの心は、飴細工のようにもろくなっているのだ。こんな状況で、
生前の坂上くんのことを根ほり葉ほり聞かれたら、誰だって不快に
思ってしまうだろう。

聞き込み調査は、まだ自肅ね。

「それがいいと思つ

今わたしたちがすることは、坂上くんの落とし物を一つでも
多く探すことね。どんな小さなことでも、何に繋がってるか分から
ないからね。

ここでわたしは変なことを思つ出してしまつた。

この前に見たテレビ番組で、マジシャンがマジックをしていた。
彼はいろんな色のハンカチをパツと消してしまい、それをポケット
の切れ端から一気に取り出した。いつの間にか結ばれていた七色の
ハンカチの先からは、万国旗まで飛び出してきた。

あんな風に、坂上くんの記憶も一気に出てくればいいのに。

じゃ、そろそろ教室に戻らないと。

「うそ

何か思い出したら言ひてね。どんなやうなことでもいいから

う。

「分かったよ

坂上くんに別れを告げ、わたしは教室のドアをくぐつた。空気が湿つた空間にわたしは身を投げる。相変わらず雰囲気が重い。黒いやが浮かんで見えるようだ。

もう少し明るくしたら? なんて言つたら、きっと軽蔑されてしまうだろう。

わたしだけが知つていてみんなが知らないことなんだから仕方ないんだけど、やっぱりそんなことを思つてしまつ。

でもね、ほんのちょっとだけは晴れ間があつてもいいんじゃないかな。曇り空じや、心が暗くなるばかりだよ。

ね、本日はこんなに晴天なんだからさ。

正美、放課後になる

放課後となつた。六限ある時間割を全てこなし、わたしは学業の鎖から解放されることとなつたのだ。

相も変わらず、教室の中の空気は沈んでいた。飛び交う言葉もなく、笑顔などはほとんど見られなかつた。

特に会話もなく、生徒たちはそれぞれの場所へと散つてゆく。重い空気を除けば、いつもの放課後の風景だ。部活をしてる人は部活の集まりへ。委員会に所属してゐる人は委員会へ。そして、何も予定もなく暇を持て余してゐる人 ていうか、わたしのことだねはぶらぶらしながら自宅へと。そうして、また明日の朝に会つまでみんな違つた生き方をすることになる。

結局、佳奈は学校を全部サボつた。気分屋な彼女のことだ、明日も来ないかもしぬ。

ひとけがまばらになつてゆく教室の風景を眺めながら、わたしは会い言葉をつぶやいた。

「本日は？」
「晴天なり」

と言つても、もう西日が傾き掛けているけどね。これから秋が深まるといつて、あつといつ間に夕暮れになつちゃうやうになる。

何か久しづりね、坂上くん。

「うん、結局は朝から話さなかつたね」

「うん、結局は朝から話さなかつたね」
「うん、結局は朝から話さなかつたね」
「うん、結局は朝から話さなかつたね」
「うん、結局は朝から話さなかつたね」

「うん、結局は朝から話さなかつたね」
「うん、結局は朝から話さなかつたね」
「うん、結局は朝から話さなかつたね」
「うん、結局は朝から話さなかつたね」

「普段せせりふをこじれるか、ひじやないの?」

失礼ね、違つわよ。

「あはは。まあ、僕の方は何かあつとこいつ聞だつたな

やうなの?..

「うん、島田わんと話してないと……時間の流れが急になるよいつな
『氣がするんだよ』

確かに、あることがないもんね。

「せうなんだよね」

「どうなの? その時の坂上くんの状況は。

「ハーン……ホントになんにもなく時間が早送りになる感じ、かな

ふむ。

「ほら、強く意識しないと周りの情報が入ってこないんだよ。強く
意識しきれりゃいつと、島田わんの心の中まで入り込んでじやつから氣
を付けないとだけど」

「じゃ、なるべく話をしましょつよ。

「え? 別にいいけど……」

何か疑問でも？

「い、いや、疑問つてわけじゃないけど

ほら、坂上くんのためよ。

「僕のため？」

坂上くんが“坂上くん”でいられるのは、この時間だけなんだから。わたしと会話をしてる時だけ、ね。

「……そつか。そつだね」

そう言つと、坂上くんは一つため息をついた。そのため息が何を意味してゐるのか分からなかつたけど、わたしは何故か寂しい気分になつてしまつていた。

もうすぐ夕方がやつてくる。そんなことを予感させる冷たい風が、窓からわたしの髪の毛を揺すつていた。秋の夕暮れつて本当に物寂しい。昔の人がよく歌に詠むわけも、少し分かる気がした。

「正美ちゃん、じゃあね」

思わず、わたしは軽く上下に揺れた。意表を突かれたとはこのことだ。ぼうっと窓の方へ思いを馳せていたら、真つ直ぐな彼女の声がわたしの無防備な心を揺さぶつたのだ。

「あ、うん、じゃね」

「今日はすーっとぼうとしてたね？ やつぱり変よ

そう言い残して千里は教室を後にしてしまつた。別れ際に言つた

リフがそれですかい……。わたしは苦笑いを浮かべた。

千里はテニス部に所属している。スカツと爽やかな彼女にぴったりのイメージだ。

わたしはまた教室を見渡す。みんなの足がいつもより早い。いつもならぐだぐだと男子も女子も談笑しているのに、今日は逃げるようになくなってしまった。まあ無理もないか。

そんなこんなで、教室の中はついにわたし一人になった。でも、実は狙つてたりして。

ねえ、これで調査ができるわよ。坂上くんの机。

「あ、だから帰らなかつたのか」

わたしもこりいりと考えてるでしょ？

よし、わたしは意を決して立ち上がつた。田指すは窓側の机。同じ教室の中、距離にしたら半径十メートルくらいだろうか。今日はとても遠く見えた。白い菊。それ以外、何もない。

坂上くんの荷物は……やっぱりないわよね。

「うん、ないね」

親御さんが持つていつたんでしょうね。

「やつだね」

やつと言えば、親御さんについては何か思ひ出がない?

「うーん……残念ながら」

まあ、無理もないことだと思った。わたし今まで、彼の両親に繋がるような情報には触れていない。

坂上くんの記憶探しは、地面に埋まつた野菜を掘る作業に似ている。ちょっとでも顔が見えていれば、きっかけさえあれば、すぐ掘り起こすことができる。でもこれがないと、掘り出しうるがない。

ゆっくり思い出しましょ。特に……家族みたいに大切な人たちはね。

「大切な人……大切な人、だね」

……あ、ごめん。

坂上くんの声は、悲しそうになつてしまつた。

「ううん、別にそういう意味じゃないけど」

わたしは少しの疑問を覚え始めていた。坂上くん、どうかしたのかしら？あの、脳天氣で楽天家の坂上くんじゃないみたいだよ。

「じめんじめん、なんか変だよね。僕」

変つてわけじゃないけど……。

「あはは、気にしないで」

ま、まあ坂上くんがそう言つなう。

「それよりも、何か僕の痕跡は残つてないのかな？」

ちょっと待つてね。

坂上くんにそう言われ、わたしは机の中を調べることにした。彼の言う通り、もしかして何か残っているかもしれない。

わたしが机の中を覗き込むと腰をかがめた、まさにその刹那だつた。

「何やつてるんだよ？」

突然響いた男の人の声に、わたしの心臓はきゅっと縮まった。

正美、ケンカする

「島田？ 何してるんだ？」

訝しげな表情を保つたまま、彼はわたしの方へと歩み寄つてくる。
……困つた。

今のわたしは、死んだ坂上くんの机の中を覗き込もうと身をががめている女子、にしか見えないのだ。とっさにいい言い訳が見つかるはずもなく、慌てふためいたわたしは椅子を思い切り倒してしまつた。動搖が次の動搖を運んでくる。完全なパニック状態だ。

「……どうした？ そんなに慌てて」

「あ、いや、その……」

首を交互に振るのだが、それが何を意味しているのか、彼にはまったく分かっていないだろう。だって、わたしにも分からぬだもん。

た、助けて。坂上くん。

「え、僕？」

あなたしかいないでしょ！

「やつ怒鳴らなくとも……」

早く！ 何か助言をうつづだい。

「素直に言つちやえば？」

「坂上くんの机を覗いてました」って? そんなこと言えないわよ。

「何で?」

だつて……。

わたしはもう一度彼の目を見やつた。真つ直ぐ、わたしのことをじつと睨んでいる。

安藤くん。安藤新一くんだ。

彼は坂上くんと仲が良かつた。休み時間にはいつも話をしていたし、中学校も一緒らしい。とても気が合つ様子だった。

坂上くん……たぶん、安藤くんのことも忘れちやつしているんだと思う。

言えないわよ。このクラスで、坂上くんがいなくなつて一番悲しんでいるのは……きっと安藤くんだから。

ふ、不謹慎な人だつて思われちゃうでしょ。

「うーん……そつか」

ほら、早くこ一案を出して。

「……じゃあ、コソタクトを探してたつてことにしたらい?」

「、古典的ね。まあいいわ。この際、仕方がないわね。

わたしは息を大きく吸い込んだ。これから水に潜るみたいに。嘘を言つてる時の気分はいいものじゃないからね。一気に吐き出すよ

う、わたしは言った。

「あ、あのね、安藤くん。コンタクトレンズをなくしちゃって、それを探してたのよ。誰かが来るとは思わなくてね、ちょっとビックリしちゃつただけ。あはは……」

「へ、えう。だつたらいいんだけど……」

勢いに任せたまくし立てたわたしに圧倒されたのか、安藤くんはぞひけない様子でうなずいた。

しばらく沈黙が訪れる。遠くの方では、野球部が「オーッ」とか言つてゐる声が響いてゐるけど。

「……島田」安藤くんはつぶやいた。

「はい？」

「お前はむし……明るいよな。羨ましいよ」

え？

安藤くんは隙間風のよつたため息を一つつくと、わたしに背を向けた。そして自分の机に向かうと、彼の荷物を肩に引っ掛けた。そのまま、安藤くんは教室を後にしようとドアに近付いてゆく。

「あの、安藤くん」

「何だ？」

彼は振り返ると、寂しさの滲んだ瞳をわたしに向かえた。わたしは言った。

「坂上くんつて……どんな人だった？」

一瞬で、安藤くんは無表情になつた。驚きもしない。動搖もしな

い。ただ、べらりと剥がれ落ちてしまったように表情を失った。わたしは思つた。本当に悲しい部分を突かれたときは、入つてこういう顔をするんだ。

しばらくの間、真空になつたみたいな沈黙が訪れた。

「……それを聞いてどうするんだよ」

彼はようやく口を開く。

投げやりな、ため息のような口調だつた。

「え……ちょっと気になつて」

また沈黙。

そして、安藤くんは淡々と言つた。

「いい奴だったよ。断言できる。あんなにいい奴はない。いつでも他人のことばかり考えて……損ばかりしてた」

彼はわたしに、またくるりと背を向けた。

そして、わたしではなく、黒板をただ見つめて、

「あいつが死ぬなんて、世の中は間違つてゐる……」やつと言つた。

.....

「ねえ、何あんなこと聞いたの？」

わたしは薄いオレンジ色に染まつた通学路を歩く。脇に田をやると、わたしと同じように校中の小学生がけらけらと笑いながら走り回つてゐる。

……安藤くんのことね。

「やつだよ」

坂上くんはきつかけさえあれば記憶を取り戻すことができる。だから、初めは忘れていた安藤くんのことも思い出したよつだ。わたしの口から、彼の名前が出た瞬間」。

安藤くんを思い出したことは……生前の坂上くんことひし、彼がどんな存在であったのか、それも思い出したくなる。だから……、

「安藤にあんなこと聞くなんて、いくら何でも非常識じゃないのかな」

おっしゃる通りです。

「だつたら、やつしてあんなこと言つたのね」

だつてわたし……なんにも知らないんだもん。

「くつ?」

坂上くんの「」。わたしは一つも知らないのよ。わたしが知つてゐる“坂上くん”は、いつもやつてわたしに取り憑いたあの坂上くんなんだもん。

「それで、知りたくなつたから聞いたつてこと?」

「うう。悪い?」

あの時、本当に無意識のうちに口に出してしまったのだ。
坂上くんって、どんな人だった？ と。

「あは、開き直り？」

開き直ってなんかないわよ。

「アハこののを開き直つて言つたんだよ」

そんなんじゃなにって言つてるでしょー。

わたしの近くでじやれあつていていた男の子たちが、びくっと身をすくめてわたしを見つめた。

「うわー、声に出して叫んでしまつたようだ。カツと顔が赤くなる。

「……ビハしたのを」

「うわー、うもないわ。

「うーん、なんか機嫌が悪いみたいだね」

そ、そんなことない。

「僕、少し邪魔みたいだ。それじゃ、またね」

え？ せ、坂上くん？

坂上くんの気配はふと消えてしまった。

冬の朝、吐いた白い息が見えなくなつてしまつよい、あつけな
く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0625a/>

本日は晴天なり

2010年10月28日08時05分発行